

2008年～2013年の集計結果からみた 「地質の日」の関連イベント

澤井祐紀¹⁾・原 英俊²⁾・今西和俊¹⁾・松島喜雄¹⁾・中島 礼²⁾・田辺 晋²⁾

1. 「地質の日」と関連イベント

「地質の日」は、ライマンらによって日本で初めての広域的な地質図、200万分の1「日本蝦夷地質要略之図」が作成された日（西暦1876年5月10日）にちなみ、2007年3月13日に地質に関係した学会・機関が発起人となって定められた記念日である。また、この日は、西暦1878年に地質の調査を行う政府の組織（内務省地理局地質課）が作られた日でもあり、地質に関わるものとして毎年5月10日は特別な日である。

毎年「地質の日」を記念して、5月10日を中心に、地質への興味と理解が拡大することへの期待を込めて全国各地でイベントが催されている。「地質の日」事業への参加は簡単で、「地質の日」事業推進委員会の事務局がある独立行政法人産業技術総合研究所に対し、「○○というイベント（通常、そのイベントは、企画展、体験イベント、野外観察会、講演会に分けられる）を（何時、何処で）地質の日を記念して行います」と宣言するだけである。イベントの実施時期は5月10日に限らず、年末のイベントを「地質の日」と関連させてもかまわない。登録されたイベントについては、産業技術総合研究所地質調査総合センターのホームページに掲載され、日時や内容が公開される（産業技術総合研究所 地質調査総合センター、2013）。イベントへの参加の呼びかけおよびその集計作業は、関連事業の情報を集約することで、地質の普及・理解を共有してこうという趣旨で行っている。「地質の日」の制定までの経緯は斎藤（2008）に述べられている。各地で開催されたイベントの具体的な内容については、地質ニュースの2009年1月号および2月号や、GSJ地質ニュースに掲載された記事（例えば、今西ほか、2012；及川ほか、2012；重野ほか、2012）などを参照していただきたい。本稿では、2008年度の第1回から2013年度の第6回までに蓄積してきたイベントのデータをまとめ、その推移を紹介したい。

2. イベントの参加人数

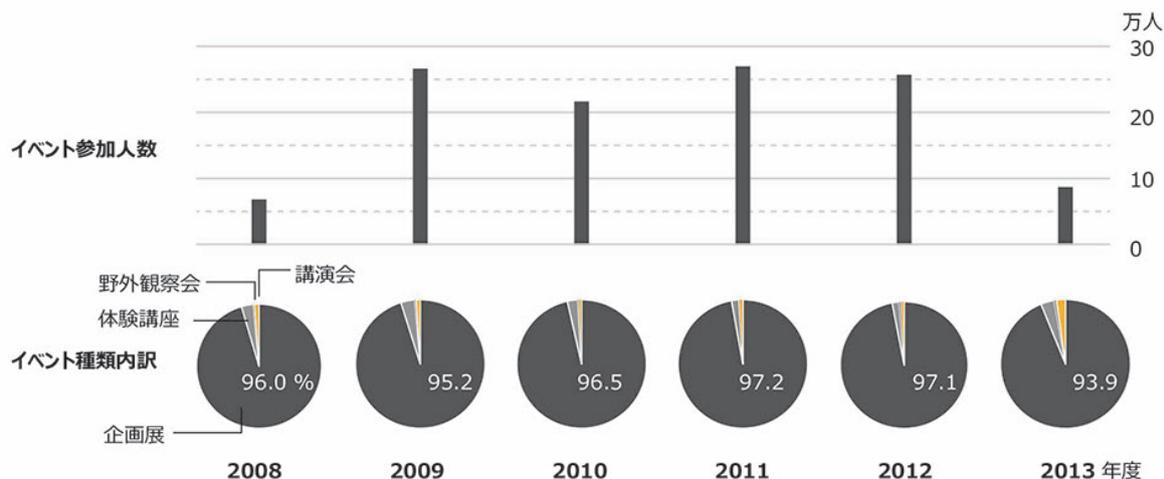
イベントの参加者数（第1図、第2図、第3図）は、主催団体からいただいた集計報告に基づいている。まず各年度におけるイベントの参加人数に目を向けると、2009年以降からは4年連続で20万人以上の参加者数を記録していた（第1図上段）。これに対し、2013年度はそれを大きく下回っている。この減少の大きな原因は、2013年の企画展（あるテーマに沿った特別展示）に参加した人々が非常に少なかったことがあげられる。例年、「地質の日」に関連したイベントとして、全国各地の博物館で企画展が開催される。この企画展の期間中に博物館を訪れた人々すべてが『地質の日』事業に参加した」として集計されるため、企画展の数が少ない場合やその実施期間が短い場合は、年間を通したイベント参加人数に大きな影響を与える。毎年、イベント参加者の総数に対する企画展の寄与率が90%以上であるから（第1図下段）、この考えは大きく間違っていないはずである。ただし、2010年と2011年については、60日余りの開催期間で14万人を超える参加者数を記録した企画展が報告された。こうした人気企画が実施された年は、年間総参加者数（第1図上段）を「地質の日」事業の活動度の指標としていいのか、その評価が難しくなる。

企画展の参加者以外（体験講座、野外観察会、講演会）の推移に注目すると、体験講座の参加者数が年々減少しているのが顕著である（第2図）。野外観察会は、2011年までは減少傾向にあったものが、2012年に大きく回復している（1,570人）。しかしながら、2013年には以前の参加者数に戻ってしまっている（2011年：568人、2013年：591人）。講演会は、体験講座に比べると参加者数が少ないものの、過去4年間において1,300～2,000人の参加者を維持している。

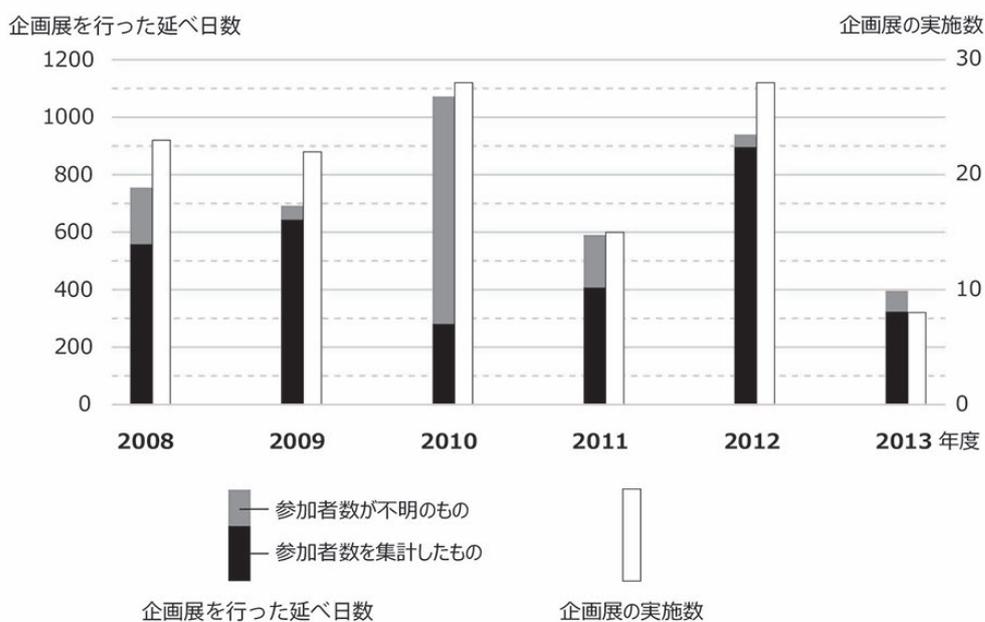
本章で述べたように、イベントの参加人数については、企画展のような集計が難しいイベントが大きく影響を与える。さらに、今回扱ったデータの中には、集計を行って

1) 産総研 活断層・火山研究部門
2) 産総研 地質情報研究部門

キーワード：地質の日、成果普及イベント



第1図 上段：「地質の日」の関連イベントに参加した人数の推移。下段：各年度に実施されたイベントの種類の内訳。



第2図 各年度に実施された企画展の数と開催日数の推移。

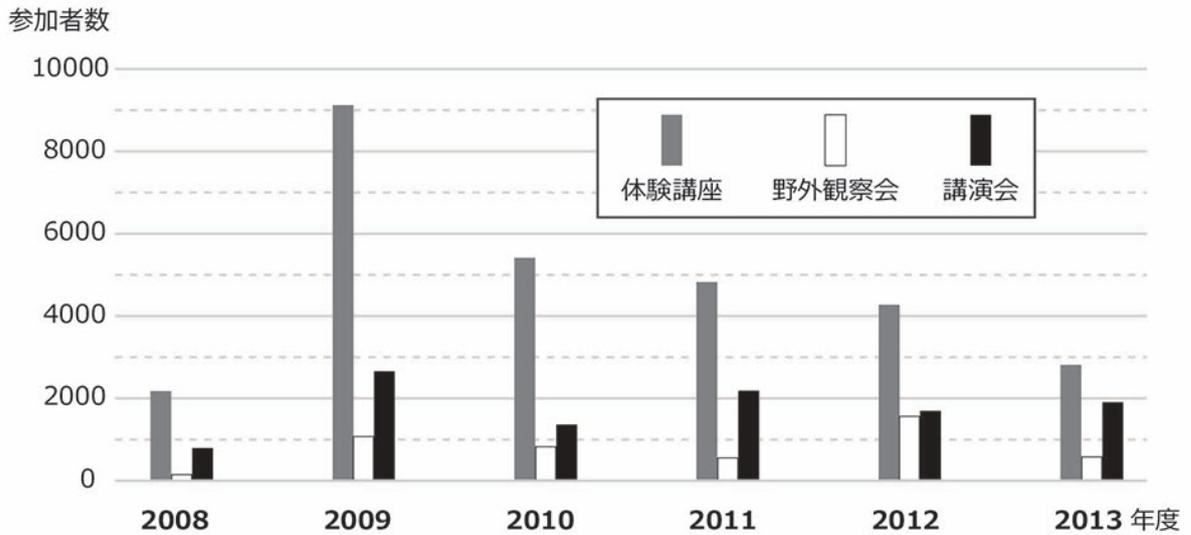
ないイベントが幾つか含まれており、「地質の日」事業の参加者総数はあくまでおおよその目安であり、正確な把握が困難であることを強調しておきたい。

3. イベント総数と参加機関数

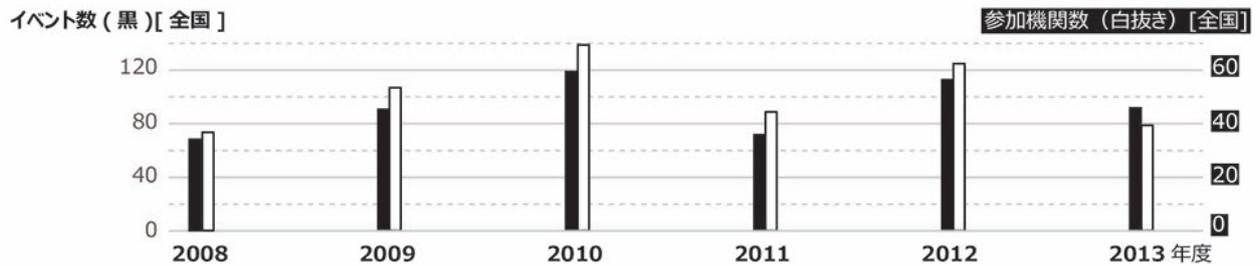
東日本大震災が起きた2011年を例外とすると、イベント数と参加機関数は、2009年のピークから緩やかに減少しているように見える(第4図)。イベントの総数に対する各地域の寄与率をしてみると、どの年度も関東地方と中部地方で

半分以上を占めているのが特徴的である。参加機関の総数に対する各地域の寄与率は、おおむねイベントの総数に対するそれと似ている。すなわち、関東地方と中部地方で40～50%を占めている状態である。他の地域に目を向けると、中四国地方の寄与率が年々増加しているのが読み取れる。

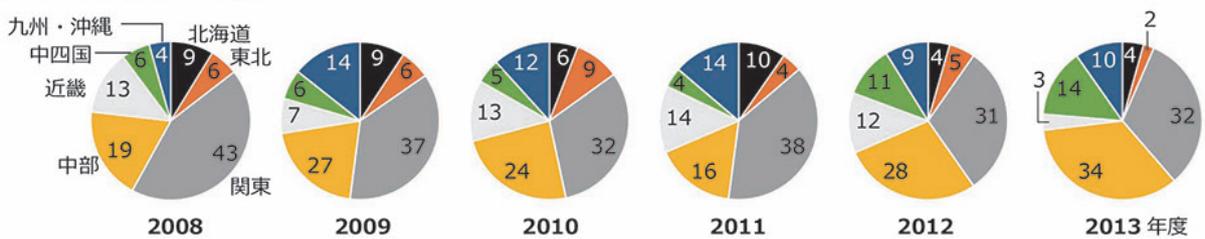
イベント数と参加機関数は、各年度において一致した値を示さない(第4図上段)。また、イベント数と参加機関数に対する各地方の寄与率も、各年度においてあまり一致しない。これは、複数の機関が1つのイベントを共催していたり、1つの機関が複数のイベントを開催していたりするからである。



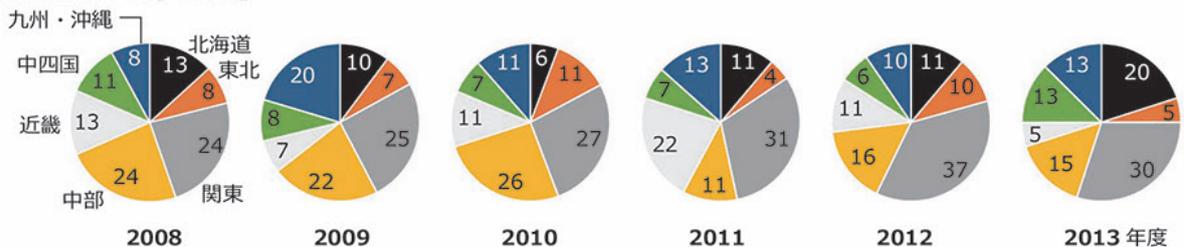
第3図 各年度に実施されたイベントのうち、体験講座、野外観察会、講演会の開催数の推移。



イベント数の内訳 (%) [地域別]



参加機関内訳 (%) [地域別]



第4図 上段：各年度におけるイベント数(黒い棒)と事業に参加した機関数(白い棒)の推移。中段：イベント数に対する各地域の寄与率の推移。下段：事業に参加した機関数に対する各地域の寄与率の推移。

このことを念頭に個々のデータを見直すと、毎年、特定の機関が努力してイベント数を“稼いで”いることが読み取れた。例えば、千葉中央博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、豊橋市自然史博物館、徳島県立博物館、2010年の佐賀県立宇宙科学館、2011年以降の岐阜県博物館などが、複数のイベントを実施してイベント数を稼いでいる（紙面の都合上、努力されている全ての機関は列挙することができないのでご了承いただきたい）。以上のことから、現在の「地質の日」の事業は、ある地方の特定の機関が努力して支えていると言ってよい状況である。

4. 「地質の日」事業の活性化に向けて

集計記録の全体を見渡すと、2013年度におけるイベント参加者数の激減が目立つ。しかしながら、「地質の日」事業の主旨を考えると、“ある地方のイベント”となっている状況や、特定の機関がイベント数を稼ぐことで現状を維持しようとしていることのほうが深刻な問題である。また、地質を学ぶために必須である体験講座や野外観察会の参加者数が減少している（第3図）のも気になる点である。

地方のイベント化を改善する方法の1つとして、これまで登録数が少なかった地域（東北地方、近畿地方）の関係機関等に対して声をかけやすい状況を作り、イベント登録を促すことがいいかもしれない。特に、そうした地域におけるジオパークあるいはジオパークを目指す地域団体との連携を強め、「地質の日」関連の地域イベントを行うことも可能だろう。そうしたネットワークの拡大によって、「地質の日」の事業が全国に広がり、イベント数のばらつきも平滑化が進むことが考えられる。

「地質の日」事業も6回目となり、このまま定着してお馴染みのものになるかどうかの過渡期にあるのかもしれない。だとすれば、事業推進委員会と各機関が、これまで以上に連携・協力することを意識し、事業の活性化を進めていく必要があるだろう。

あとがき

本論のテキスト粗稿および図は筆頭著者が作成した。第二著者以降は、推移の分析と粗稿の改善に参画し、姓のアルファベット順に並んでいる。神奈川県立生命の星・地球博物館の平田大二氏には、原稿に対してコメントをいただきました。「地質の日」事業を実施された関係諸機関、団体からは参加者数など各種のデータを提供していただきました。末筆ながら、記して感謝の意を表します。

文 献

- 今西和俊・渡辺真人・及川輝樹・田辺 晋（2012）「地質の日（5月10日）」記念イベント 経済産業省本館ロビー展示開催報告. GSJ地質ニュース, 1, 313-314.
- 及川輝樹・利光誠一・今西和俊・宮内 渉・酒井 彰・関口 晃・西沢良教・朝川暢子・吉田清香・兼子尚知・宮地良典・Shuresuta Gaurabu・吉岡真弓・宮崎晋行・持丸華子・藤井孝志・野々垣進・宮川歩夢・北島弘子（2012）地質の日関連イベント：地質標本館「作って学べる！ 工作コーナー」（5月12日）およびつくばフェスティバル「移動地質標本館」（5月12～13日）開催報告. GSJ地質ニュース, 1, 316-317.
- 斎藤 眞（2008）第1回「地質の日（5月10日）」行事が全国で行われる. GSJニュースレター, no. 44, 1-2.
- 産業技術総合研究所 地質調査総合センター（2013）5月10日は地質の日, <https://www.gsj.jp/geologyday/index.html>（2013/10/11 確認）
- 重野聖之・七山 太・石井正之・小久保慶一・山代淳一・近藤康生・松島義章・横山芳春・上原 亮・安藤寿男（2012）平成23年度「地質の日」普及行事，“パシクル沼に潜む巨大津波痕跡と化石カキ礁の秘密”実施報告. GSJ地質ニュース, 1, 266-271.

SAWAI Yuki, HARA Hidetoshi, IMANISHI Kazutoshi, MATSUSHIMA Nobuo, NAKASHIMA Rei and TANABE Susumu (2014) A report on Geology Day's events based on aggregated data of 2008-2013.

（受付：2013年10月18日）